

## 女子の名前における“姓・名”の拍数 —— 2拍の姓でのバイアス

吉 岡 英 二

### はじめに

日本の人名は“姓”と“名”で構成される。“名”は個々人の出生時につけられるものであるが、“姓”は生まれながらに決まっており、名付け親でも選ぶことができない。そのため、“名”は“姓”を既定のものとして決めなければならない。そこに避け難く付帯する“姓”は、“名付け”に対してどのような影響や制約を与えているのだろうか。ここでは、一定の年齢層の女子の名簿をもとに、主として“姓”と“名”の拍数および“名”の最終音との関係について分析したので報告する。

### 方法

分析のための基礎資料としては、K女子短期大学の6つの学科に平成9年度に在籍している全学生（2809名）の名簿を用いた。これらの学生は、通常教育課程を遅滞なく（いわゆる「浪人」や留年などの経験を経ずに）就学して進学したとすれば、昭和52年4月から昭和54年3月までに出生した年齢層で構成されているものと考えられる。また、名簿に記された姓・名の“読み”は、本人または保護者などによって記されたカナ書きから得ている。分析手順として、まず上述の名簿から姓・名の拍数を数え、その出現数をまとめた。また、名の最終音の出現数を調べ、姓・名の拍数ごとの出現率をまとめ、それらのバイアス等を調べた。統計処理は、できる限り二項検定によった。（ただし、試行回数が多く二項検定による計算負担が過大なものについては正規分布による検定を行った。）

### 結果

姓の拍数（本文・表中では□の数で示す）と名の拍数（本文・表中では○の数で示す）の頻度について表1に示した。姓の拍数のほとんどは2～5拍であった。例外的なものとして、1拍の姓‘□’が2例、7拍の姓‘□□□□□□□’が1例見られた。また、名の拍数のほとんどは2または3拍であった。例外的なものとして、4拍の名‘○○○○’が3例見られた。

名の拍数の出現率に、姓の拍数に応じた偏りがあるかどうかについて検討した。その結果、‘□□’のもとでの‘○○’の出現率（13%（22/171））が、全体での‘○○’の出現率（24%（577/2409））より有意（ $p < 0.001$ ）に低かった。また、その一方で‘□□’のもとでの‘○○○’の出現率が有意（ $P < 0.001$ ）に高かった。その他の拍数の姓のもとでの名の拍数の出現率には、全体の比からの有意な偏差は見られなかった。

表2に、名の最終音の出現数を示した。その中で多いものから挙げると、コ（45.2%）、

表1 姓・名の拍数の出現数と率(%)

名\姓	□	□□	□□□	□□□□	□×5	□×6	□×7	計
○○	1 (5)	22 <sup>†††</sup> (13)	265 (25)	283 (24)	6 (23)	0	0 (0)	577 (24)
○○○	0 (0)	148 <sup>†††</sup> (87)	775 (75)	885 (76)	20 (77)	0	1 (100)	1829 (76)
○○○○	1 (5)	1 (1)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	0	0 (0)	3 (0)
計	2 (100)	171 (100)	1040 (100)	1169 (100)	26 (100)	0	1 (100)	2409 (100)

(†††, ††††: 出現率の偏差が有意 (p&lt;0.001); \* 正規分布による検定)

表2 名の最終音の出現数

行\段	ア	イ	ウ	エ	オ
ア	2	59	2	141	15
カ	113	149	0	0	1089
サ	24	2	0	3	0
タ	0	9	7	0	11
ナ	31	0	0	10	6
ハ	1	0	0	0	59
マ	3	375	0	0	2
ヤ	34		4		55
ラ	2	137	25	0	7
ワ	14				
ン	3				
ガ	0	0	1	0	0
ザ	0	0	4	0	0
ダ	0	0	1	0	0
バ	0	1	7	0	0
パ	0	0	0	0	0

ミ (15.6%), キ (6.2%), エ (5.9%), リ (5.7%), カ (4.7%) の順で現れ、イ・ホ (2.4%), ヤ (1.4%), ナ (1.3%), ル (1.0%), サ (1.0%), オ (0.6%) と続く。

姓・名の拍数に応じた名の最終音の出現数について、表3・表4にまとめた。(これ以降は、1拍・7拍の姓、4拍の名(計4例)については含めずにまとめた。そのため、合計数は表1・表2と一致しない。)

それぞれの最終音が2拍の名でよく使われるか、3拍の名でよく使われるかについては大きな偏りがある。たとえば、‘○○コ’は1086例見られるが、‘○コ’は2例しか見られない。一方‘○○キ’の46例に対して‘○キ’は103例にのぼる。これは、それぞれの音の2拍/3拍の名としての使いやすさと、この年齢層での名前の流行などを反映したものであろうと考えられる。

以上の偏りを踏まえた上で、姓の拍数毎に名の最終音の出現率に偏りがなくどうかについて検討した。その結果、‘□□○○’の組み合わせでの名の最終音について、以下の2例に5%の有意水準で出現率の偏りが見られた。

- ・ ‘○○コ’は、全体での出現率は59.4% (1086/1828) であるが、‘□□○○コ’の

表3 2拍の名‘○○’の最終音の姓の拍数ごとの出現数(%)

名\姓	□□	□□□	□□□□	□×5	計
○キ	3 (14)	48 (18)	51 (18)	1 (17)	103 (18)
○ミ	4 (18)	31 (12)	39 (14)	0 (0)	74 (13)
○カ	2 (9)	31 (12)	32 (11)	0 (0)	65 (11)
○エ	2 (9)	28 (11)	27 (10)	1 (17)	58 (10)
○ホ	3 (14)	21 (8)	29 (10)	1 (17)	54 (9)
○イ	2 (9)	23 (9)	24 (8)	0 (0)	49 (9)
○リ	2 (9)	17 (6)	16 (6)	0 (0)	35 (6)
○ヤ	1 (5)	10 (4)	20 (7)	1 (17)	32 (6)
○ナ	1 (5)	8 (3)	10 (4)	1 (17)	20 (3)
○オ	1 (5)	9 (3)	5 (2)	0 (0)	15 (3)
○ヨ	0 (0)	10 (4)	5 (2)	0 (0)	15 (3)
○フ	0 (0)	5 (2)	7 (2)	1 (17)	13 (2)
○チ	0 (0)	5 (2)	4 (1)	0 (0)	9 (2)
○サ	0 (0)	6 (2)	2 (1)	0 (0)	8 (1)
○ノ	0 (0)	3 (1)	1 (0)	0 (0)	4 (1)
○ユ	0 (0)	1 (0)	3 (1)	0 (0)	4 (1)
○マ	0 (0)	3 (1)	0 (0)	0 (0)	3 (1)
○ウ	0 (0)	2 (1)	0 (0)	0 (0)	2 (0)
○コ	0 (0)	1 (0)	1 (0)	0 (0)	2 (0)
○モ	0 (0)	0 (0)	2 (1)	0 (0)	2 (0)
○ン	0 (0)	1 (0)	1 (0)	0 (0)	2 (0)
○ズ	0 (0)	1 (0)	1 (0)	0 (0)	2 (0)
○ア	1 (5)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)
○セ	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	1 (0)
○ツ	0 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)
○グ	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	1 (0)
○ヅ	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	1 (0)
計	22 (100)	265 (100)	283 (100)	6 (100)	576 (100)

出現率は50.0% (72/148) であった。(p<0.01)

- ・ ‘○○カ’ は、全体での出現率は2.6% (48/1828) であるが、‘□□ ○○カ’ の出現率は6.1% (9/148) であった。(p<0.05)

また、5%の有為水準には達しないが、以下の2例においても相応の出現率の偏りが見られた。

- ・ ‘○○ミ’ は、全体での出現率は16.5% (301/1828) であるが、‘□□ ○○ミ’ の出現率は12.2% (18/148) であった。(p<0.1)
- ・ ‘○○キ’ は、全体での出現率は2.5% (46/1828) であるが、‘□□ ○○キ’ の出現率は4.7% (7/148) であった。(p<0.1)

表4 3拍の名‘○○○’の最終音の姓の拍数ごとの出現数(%)

名\姓	□□	□□□	□□□□	□×5	計
○○コ	74 <sup>††</sup> (50)	471 (61)	526 (59)	15 (75)	1086 (59)
○○ミ	18 <sup>(†)</sup> (12)	124 (16)	156 (18)	3 (15)	301 (16)
○○リ	12 (8)	41 (5)	48 (5)	1 (5)	102 (6)
○○エ	10 (7)	33 (4)	38 (4)	1 (5)	82 (4)
○○カ	9 <sup>†</sup> (6)	16 (2)	23 (3)	0 (0)	48 (3)
○○キ	7 <sup>(†)</sup> (5)	17 (2)	22 (2)	0 (0)	46 (3)
○○ヨ	5 (3)	17 (2)	18 (2)	0 (0)	40 (2)
○○ル	1 (1)	12 (2)	12 (1)	0 (0)	25 (1)
○○サ	2 (1)	6 (1)	8 (1)	0 (0)	16 (1)
○○ト	2 (1)	3 (0)	6 (1)	0 (0)	11 (1)
○○ナ	2 (1)	6 (1)	3 (0)	0 (0)	11 (1)
○○ネ	1 (1)	6 (1)	3 (0)	0 (0)	10 (1)
○○イ	0 (0)	2 (0)	7 (1)	0 (0)	9 (0)
○○ロ	1 (1)	3 (0)	3 (0)	0 (0)	7 (0)
○○ブ	1 (1)	5 (1)	1 (0)	0 (0)	7 (0)
○○ツ	1 (1)	4 (1)	0 (0)	0 (0)	5 (0)
○○ホ	0 (0)	2 (0)	3 (0)	0 (0)	5 (0)
○○シ	1 (1)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	2 (0)
○○セ	0 (0)	1 (0)	1 (0)	0 (0)	2 (0)
○○ノ	0 (0)	1 (0)	1 (0)	0 (0)	2 (0)
○○ヤ	0 (0)	1 (0)	1 (0)	0 (0)	2 (0)
○○ラ	0 (0)	2 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (0)
○○ズ	0 (0)	1 (0)	1 (0)	0 (0)	2 (0)
○○ア	0 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)
○○ハ	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	1 (0)
○○ワ	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	1 (0)
○○ビ	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	1 (0)
計	147 (100)	775 (100)	885 (100)	20 (100)	1827 (100)

(††, †† (p&lt;0.01); †, † (p&lt;0.05); (†), (†) (p&lt;0.1))

名の最終音について、その他の拍数・音の例では出現率には有意な偏差は見られなかった。

## 考察

結果に対する考察に先立って、ここでの調査にあたって考慮しなければならない問題について指摘する。

ここで扱った姓名およびその‘読み’は学生の入学時の申し出によるものであり、出生時に名付けられた姓名から異なっている場合がある。とくに、結婚・離婚・養子縁組などによる改姓があったばあいには、名付けられた時の姓と分離してしまうので、現在の姓名から姓の影響を論じることができなくなってしまう。しかし、おそらくそれらの改姓の頻

度はあまり高くなく、また改姓が姓の拍数などに対して何らかの方向性をもって起こることは考えにくい。そのため、一定数の改姓がされていたとしても、統計の検出力を弱める作用は生じるが、ここでの議論を誤った方向へ導くことはないだろう。

外国名については、ここではとくに排除せずに分析した。外国名と判断する客観的基準を設定しがたく、また恣意的に外国名を排除する場合には、姓名の拍数・名の最終音など、ここで分析に供した諸因子を用いてしまう可能性がある。また、ここで扱ったすべての名前は、外国名であってもカナによる表記がされており、日本語の中で発音されることを前提に記されたものであると考えられる。これらのことから、恣意的な基準で外国名を排除するよりも、それらを含めて分析するほうが日本語の中での姓名の扱いとして客観性があると判断した。

ここで分析に供した名簿は、特定の短期大学に在学している女子という、性別・年齢・住所地などの生活環境が概ね均一化されている集団の姓名である。そのため、性別・年齢などのパラメーターに依存したばらつきを考慮することなく分析することが可能ではあるが、一方できわめて限定された集団であることには十分に注意しなければならないだろう。とくに女子の名の拍数は2, 3拍にかぎられており、これは1900年以降の人名を調べた田原(1991)の調査結果にも一貫して見られる女子の名の通時的な性質である。また、きわめて限定された年齢層の名簿に依存していることについても、以下のような点を踏まえた注意が必要であろう。

これまでの名前の研究でとくに興味を持たれてきた点は、名前の経時的な変化である。「昔に撮った写真を見るように、現在にいながらにして過去の言語状態を観察することができる」(田原, 1991)と述べられているとおり、命名の傾向の経時的変化は以降の年齢層にそのまま保存されるので、長期間にわたってデータを集めなくてもある時点に広い幅の年齢層の名前を調べることによってその経時的変化をとらえることができる。とくに‘〇〇コ(子)’の出現率の変化について言及した研究例は多く、その他‘〇〇ミ(美・実など)’・‘〇〇エ(江・絵など)’の出現率の変化についてもしばしば語られている(田原, 1991; 林(監), 1982; 麻生, 1992; 1994)。それらの研究例の中で一貫してみられる傾向は、最近40~50年の‘〇〇コ’の減少傾向である。はじめにも述べたように、ここで用いた学生名簿は昭和52年4月以降の2年間に出生した学生を主体としていると考えられる。そのため、ここで分析した名の出現傾向についても、上に述べたような経時的変化の中での一つの断面にしか過ぎない点を認識しておく必要がある。

しかし、上に挙げた研究例の中には、ここで着目したような姓の影響について言及したものは見られない。以上の点を踏まえた上で、ここで明らかになった点は以下のように整理できる。

- ・ 2拍の姓‘□□’の場合、2拍の名‘〇〇’は避けられ、3拍の名‘〇〇〇’が付けられる傾向がある。
- ・ 2拍の姓に3拍の名が付けられる場合、‘〇〇コ’、‘〇〇ミ’といった全般に出現率の高い名は避けられ、‘〇〇カ’、‘〇〇キ’などの比較的出現率の低い名前が付けられる傾向がある。

ヒトの名付け親は、既定の姓のもとに名を付けなければならない。当然そこでは姓に応じた何らかの影響があるものと考えられる。ここで2拍の姓のもとでの名に明白な傾向が見られたことは、それを示す一つの証拠であろうと考えられる。それでは、とくに2拍の姓は、それに続く名を命名する際にどのような影響を与えているのだろうか。上に述べた傾向から考察したい。

まず、‘□□○○’が避けられ‘□□○○○’が選択される傾向については、その拍数の少なさ（頼りなさ）が関係しているのではないだろうか。表1から姓名を合わせた拍数を確認すると、‘□□○○’の拍数は姓名あわせて4拍に過ぎず、個人を示すための姓名の拍数としては3拍（1例）に次いで少ない。また、表1の姓の拍数の分布から算出できる全学生の姓名を合わせた拍数（平均±SD）は $6.20 \pm 1.86$ であり、姓名を合わせて4拍という数は、その平均よりかなり小さな数であると感じられる。命名者は、ふつう姓とともにその名を発音してその音感を確かめる。そこで、2拍の姓に続く2拍の名では、拍数が少なすぎることによる不安定感を感じるので、3拍の名が選択される場合が多くなるのではないだろうか。

それでは、‘□□○○コ’や‘□□○○ミ’といった名が避けられる傾向についてはどのように解するべきであろうか。ここでの結果からだけでそれらの背景について考えることは困難だが、とりあえずは姓名の“存在感”という観点から考察したい。すなわち、2拍の姓はその拍数が少ないため本来的に姓としての存在感に欠けるのではないかと考えた。先に述べたように、2拍の姓に2拍の名がつけられることが避けられる理由も、そこで合わさった姓名に存在感が欠けることに求められると言い換えることができるかもしれない。また、2拍の姓が本来的にその存在感をもたないとすれば、‘○○コ’や‘○○ミ’といった3拍の名として類出の名を付けるより、‘○○カ’や‘○○キ’といった最終音として比較的まれな音をもつ名を付けたほうが、より存在感をアピールできるように命名者が感じているからではないだろうか。

以上の分析および考察は、はなはだ不完全なものであるが、ここでの結果から考えられる一つの思考経路として述べておく。また、今後命名に際しての姓と名との関わりという観点からの研究によって、その心理的背景などが明らかになることを期待する。

謝辞：本報告の基礎データである学生名簿は、K女子短期大学教務課より提供いただいた。また、本稿をまとめるにあたって、愛媛大学教育学部・佐藤栄作先生、神戸山手女子短期大学教養学科・井上道雄先生、同国文学科・阿部忍先生には関係する文献の紹介も含めた御支援とあわせて、さまざまな面からの貴重な御意見を賜わった。とくに佐藤先生からは、女子の名付けの歴史にさかのぼった考察を含む御意見を頂いた。しかし、私自身それらの経緯に不案内であり、歴史的経緯を踏まえた考察を行うことは能力に余るものでもあったので、ここでは単純にその拍数や頻度からの印象に基づいた考察にとどめた。上に挙げた先生方には深く謝意を表するとともに、いずれ本論に反駁が加えられることを期待するものである。

## 参考文献

- 田原 広史 (1991) さまざまの命名—人名『日本語学』10(6): 42-50.
- 森岡 健二 (1977) 日本人の名前『月刊 言語』6(1): 16-25.
- 築島 謙三 (1953) 名まえのつけ方の心理『言語生活』(27): 22-28.
- 林 大 監修／宮島 達夫・野村雅昭 編 (1982) 人名・地名—8 [女の名前]『図説日本語—グラフで見ることばの姿—角川小事典9』146-147. (角川書店・東京)
- 麻生 健人 (1992) 女性の文字が表す意味—短大生の名前にみる命名の心理—『松山東雲短期大学研究論集』(23): 51-64.
- 麻生 健人 (1994) 女性名を構成する音—短大生の名前に見る名前の型—『松山東雲短期大学研究論集』(25): 11-31.
- 寿岳 章子 (1979)『日本人の名前』(大修館書店)

